

## 第6回 ICT 活用実践道場

### 種なしぶどう（大粒種）袋かけ、新梢管理 資料

令和元年 7 月 10 日 長野農業改良普及センター

#### 1 好適樹相の比較

表 好適樹相の比較

品種	目標房重	目指す樹相	好適樹相（新梢長）		
			開花直前	満開 70 日後	満開 70 日以降の新梢管理
無核巨峰	350～400 g	開花までに 70～80cm 程度に伸長させ、最終的に 100～120cm 程度にする	80cm 程度	100～120cm	遅伸びする新梢は摘心する
ナガノパープル シャインマスカット ピオーネ クイーンニーナ	400～550 g	開花までに一気に 90cm 程度まで伸長させ、2 回の摘心（開花前とベレーゾン頃）で 150cm 程度に抑える	90～100cm	150cm 程度（摘心実施後）	遅伸びする新梢は全て摘心し、150cm 程度に抑える

クイーンニーナは房重 500g 以下。収量 1,200kg/10a が当面の基準

#### 2 仕上げ（見直し）摘房と袋かけ

- （1）目的：病虫害防除、薬剤散布による果面汚染防止、果粉の溶脱防止、裂果防止
- （2）時期：2 回目ジベレリン処理後、果粒肥大をみながらできるだけ早く実施
- （3）最終着果量（着房程度は短梢栽培で主枝間 2.5m 新梢の間隔 20 cm、4,000 本/10a の場合）

品種名等	短梢・中梢栽培		
	着房程度	房数	収量 kg
無核巨峰（中梢）	—	3,750	1,500
ナガノパープル	4 新梢に 3 房	3,000	1,200
ピオーネ	3 新梢に 2 房	2,800 ～ 3,000	1,500
シャインマスカット	3 新梢に 2 房 ～ 4 新梢に 3 房	3,000	1,500
クイーンニーナ	8 新梢に 5 房	2,400 ～ 2,600	1,200～1,300

##### （4）袋かけ

摘粒及び 2 回目のジベレリン処理が済んだら、できるだけ速やかに袋かけを行う。  
袋かけ予定日に梅雨が明けた場合は、2～3 日、高温に慣らしてから袋かけを行う。  
袋かけが早いほど果粒汚染や晩腐病の予防効果が高い。

##### （5）短梢栽培での着果量調整法（新梢本数 4,000 本/10a の場合）

**3,000 房/10a であれば、主枝 1 m あたり 7.5 房（両側合計）が目安となる。**

**2,500 房/10a であれば、主枝 1 m あたり 6.25 房（両側合計）が目安となる。**

主枝ごとに袋の枚数を決定し、良い房から袋をかけていく（着房過多防止）。

【例】主枝長 7 m（3,000 房/10a）であれば、良い房から 52～53 房掛けて、残りは摘房する。

### 3 副梢の処理（摘心）

（１） 目的：葉数の確保と、棚の明るさを維持する

※摘心は随時行う。この時期の摘心は、成熟促進・果粒肥大への影響が大きい。

光合成で作られた養分を新葉の生産でなく、果実に蓄えるために必要。

（２） 時期および方法：開花期に摘心後、副梢が発生する

表１ 先端副梢の摘心方法(短梢栽培)

品 種	処 理 方 法
ナガノパープル	満開20～35日後頃に新梢葉と先端副梢葉をあわせて15～17枚を目安に摘心
ピオーネ	満開35～40日後頃(7月下旬頃の果粒軟化期前)に主枝間の中央部で一律摘心
シャインマスカット	7月中旬の果粒軟化期前(満開30日頃)までに新梢葉と先端副梢葉をあわせて15～17枚を目安に摘心(果粒軟化直前の強い摘心は縮果症の発生を助長)
クイーンニーナ	満開50日頃(8月上旬)に実施(着色前)

① 新梢先端は、新梢葉 1 2 枚+伸びた副梢葉を合わせて 1 5 ～ 1 7 枚で摘心。

満開後 2 5 日頃 (20～35 日) に実施する。満開後 4 0 日頃の果粒軟化期前までに摘心する。

② その他の副梢は第 2 回目のジベ処理以降、1 ～ 2 葉で摘心する。

(2 番なりが着穂する節を指でけずり取る様に、早め早めに摘心するのが理想)

→ ただし、極端に強い副梢は基部からかき取る。

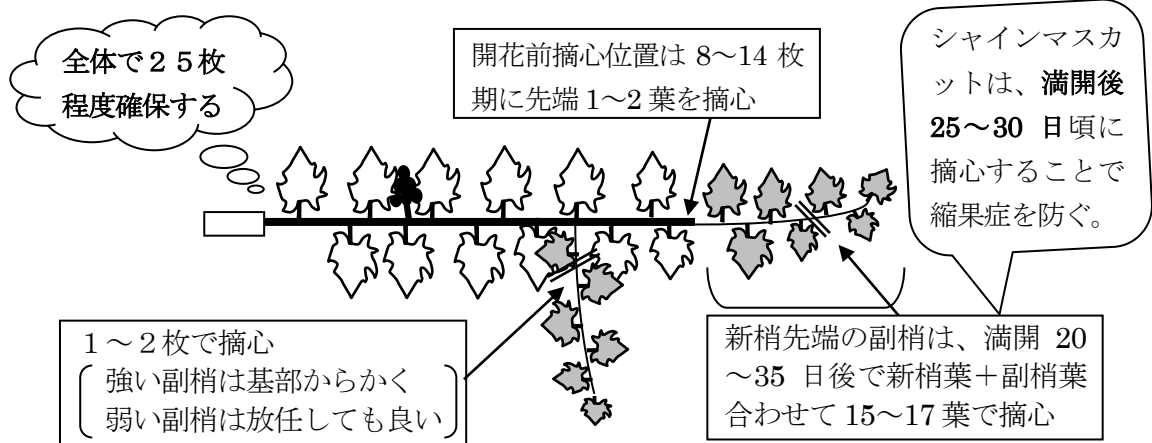


図 副梢の処理方法

③ ナガノパープルは副梢の発生が旺盛なので、随時副梢や孫枝の管理（摘心）を行う。

④ シャインマスカットは房の上部果粒の黄化防止のため、房付近の副梢を長め（3～4枚）においても良い。また、副梢の整理の時期は2回目ジベレリン処理後の方がよい。

⑤ クイーンニーナは直光型（直接日光が当たらないと着色しないタイプ）なので、他の品種よりも園地を明るめに管理する。（特に着色期になったら園地を明るく保つ。）

### 4 かん水（特にナガノパープル）

（１） 落花直後～果粒軟化期：たっぷりかん水（巨峰に準じる）

（２） 着色期以降：少量多回数のかん水（1回当たり10～15mm程度を週に2回程度）により土壌水分の変動を抑制。→果肉の張り維持。裂果防止。

※梅雨明け後の乾燥には注意。梅雨明け後5日たっても雨がなかったら、まずかん水を！